



2019年度 第2回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2020年4月～9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な離接岸を繰り返しながら、全般的には「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表面水温は、全般的には「やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度

「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年並みで、平年を下回る。
- (5) ウルメイワシは前年・平年を下回る。
- (6) カタクチイワシは前年・平年並み。

※「前年」は2019年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 西海区水産研究所

担当：業務推進部 薄、清本

漁況：資源海洋部 大下、高橋

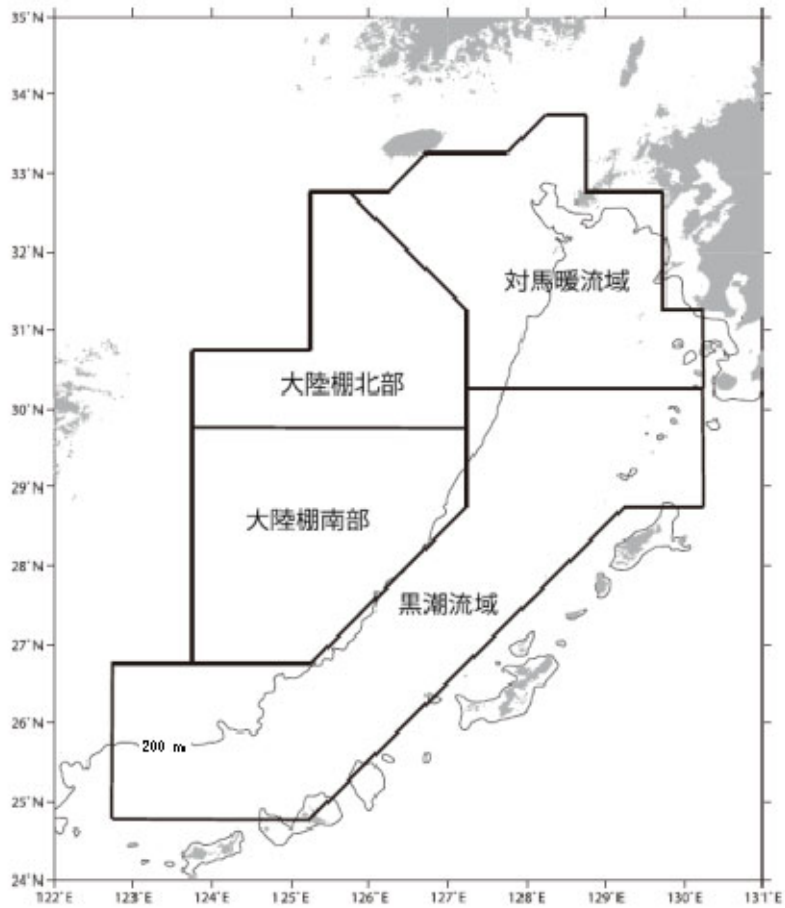
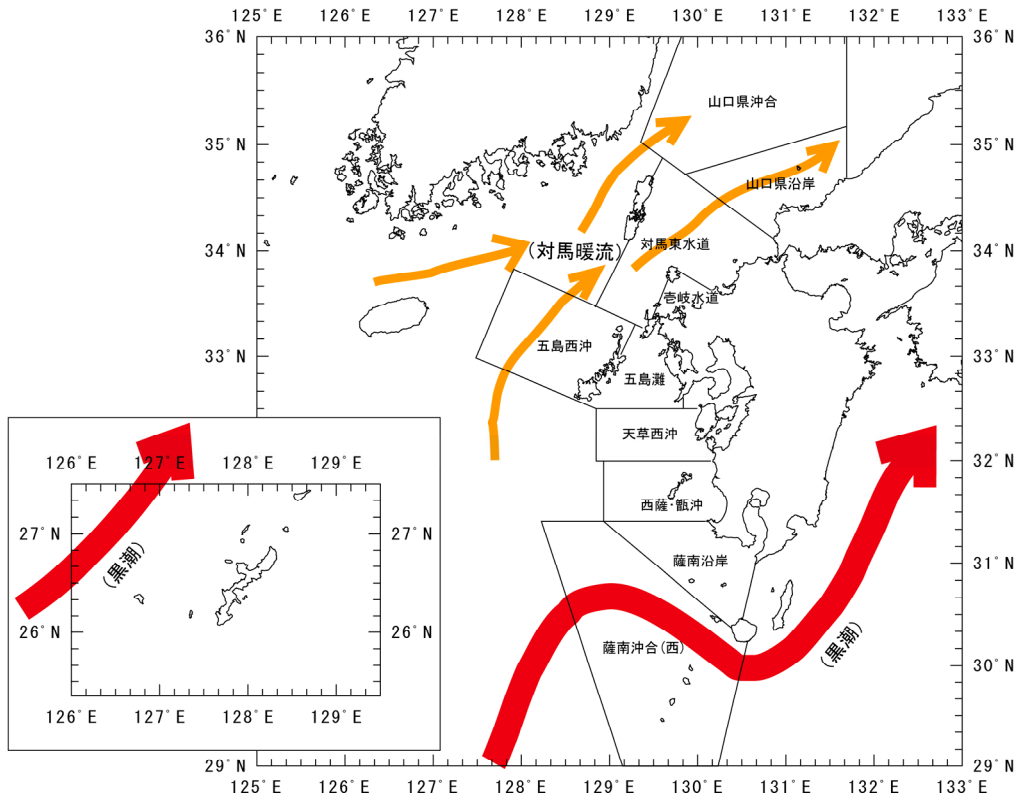
海況：資源海洋部 大下、種子田

電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7677

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2020年4月～9月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は短期的な離接岸を繰り返しながら、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚上は「平年並み～やや高め」、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合は「やや高め」、黒潮流域は「やや高め～かなり高め」で経過する。

2. 経過（2019年10月～2020年3月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：10・11月「やや高め」、12月～2月「かなり高め」。

南部：10・11月「平年並み」、12・1月「かなり高め」、2月「やや高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、10月～2月は「接岸傾向」で経過。

(2) 海面水温

10・11月「平年並み」、12・1月「やや高め」、2月「かなり高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：10・11月「平年並み」、12月「やや高め」、1・2月「平年並み」。

山口県沿岸：10月「平年並み」、11・12月「やや高め」、1月「かなり高め」、2月「はなはだ高め」。

対馬東水道：10・11月「やや高め」、12月「かなり高め」、1月「やや高め」、2・3月「かなり高め」。

壱岐水道：10月「平年並み」、11月「やや高め」、2月「はなはだ高め」、3月「かなり高め」。

五島西沖：2月「かなり高め」、3月「やや高め」。

五島灘：11月「平年並み」、2月「かなり高め」、3月「平年並み」。

天草西沖：10・11月「やや高め」、1月「かなり高め」、3月「やや高め」。

西薩・甑沖：11・1月「やや高め」。

薩南沿岸：11・1・3月「やや高め」。

薩南沖合：11月「やや高め」、1月「かなり高め」、3月「平年並み」。

沖縄島南東：10月「平年並み」、11月「やや高め」、3月「平年並み」。

沖縄島南西：10・11月「平年並み」、3月「かなり高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：10月「平年並み」、11月「やや低め」、12月「平年並み」、1・2月「やや低め」。

山口県沿岸：10月「やや低め」、11月～2月「平年並み」。

対馬東水道：10月「かなり低め」、11月～1月「平年並み」、2月「やや低め」、3月「平年並み」。

壱岐水道：10・11月「平年並み」、2月「やや低め」、3月「平年並み」。

五島西沖：2・3月「平年並み」。

五島灘：11・2・3月「平年並み」。

天草西沖：10・11・1・3月「平年並み」。

西薩・甑沖：11・1月「平年並み」。

薩南沿岸：11月「平年並み」、1・3月「やや低め」。

薩南沖合：11・1月「平年並み」、3月「やや低め」。

沖縄島南東：10月「平年並み」、11・3月「やや低め」。

沖縄島南西：10月「やや高め」、11月「やや低め」、3月「平年並み」。

3. 現況（2020年3月中旬）

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「平年並み」、南部「やや高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸」。海面水温は「かなり高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「やや高め」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度

「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度

「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度

「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2020年4月～9月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2020年級群（2020年生まれ））、1歳魚（2019年級群）、2歳魚（2018年級群）。
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年並み。沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、東シナ海中・南部、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、東シナ海中・南部、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～31cmの1歳魚（豆・小銘柄）と32cm以上の2歳魚（小・中銘柄）が、漁期後半はさらに15～25cmの0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年並み。沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、鹿児島県の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では15～28cmの0歳魚（豆銘柄）と28～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では35cm前後の1～3歳魚（小～中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：漁期の後半に長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15～19cmの1歳魚（中羽・大羽銘柄）と2歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が、漁期後半は15cm以下の0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：漁期の後半が主体となる。長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15cm以上の1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：5月～8月が漁期の主体で、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期当初は8cm以上の0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）に5～8cmの0歳魚（小羽銘柄）が混じり、漁期半ばから4～10cmの0歳魚（カエリ～中羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2019年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2019年10月～2020年1月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移している。

東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2006年以降はほぼ横ばいであったが、2018年は減少して10万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、100万トン前後で比較的安定していたが、その後増減を繰り返し2000年以降は50万トン前後に留まっている。しかし、2014年以降の高い加入量により資源量は増加し、2018年の資源量は65万トンであった。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2010年より減少傾向にあり、2013年に6万トンと過去最低の値となったが、その後増加に転じ、2018年は15万トンであった。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降、比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移している。近年では、資源量は2005年に高い値を示した後、緩やかに減少と増加を繰り返したが、2014年以降、増加傾向にあり、2018年の資源量は20万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移している。近年では、2011年の4万9千トンピークに減少傾向にあったが、2018年はやや増加して4万1千トンだった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて再び増加に転じ、2013年以降も増加傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年までは100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2011年に急激に増加して4万3千トンとなった。その後は横ばい傾向にあり、2018年は7万1千トンであった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は増減を繰り返しながら推移している。近年では2003年以降は増加傾向にあり、2015年には14万トンまで増加したが、2018年は8万トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1976年～1998年には2万トンを超えていた。特に

1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年には1万トンまで減少した。2001年以降、漁獲量は増加傾向にあり、2018年は3万トンとなった。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1990年代に増加し、1998年には30万6千トンに達したが、2001年には13万トンまで減少した。資源量は2007年には24万7千トンとなったがその後減少し、2018年には8万8千トンとなった。

東シナ海・日本海における我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。漁獲量は2005年～2008年にかけて増加したが、2009年～2013年にかけて減少し、2018年には5万トンとなった。

2. 漁況の経過

2019年11月～2020年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖が主体であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計1万2千トンで前年(2018年11月～2019年1月、3万2千トン)を下回った。マアジは5千トンで前年(5千トン)並み、さば類は5千トンで前年(2万6千トン)を下回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1の通りである。マアジの漁獲量は海域によって差があるが、全体としては前年・平年並みだった。漁獲の主体は17～25cmの1歳魚と17cm以下の0歳魚であった。マサバは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は20～35cmの0～2歳魚であった。ゴマサバは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は25～40cmの0～3歳魚であった。マイワシは、前年・平年を下回り、漁獲の主体は0歳魚であった。ウルメイワシは、前年・平年を下回った。15～20cmの0・1歳魚を主体に20cm以上の1・2歳魚も漁獲された。カタクチイワシは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は5～10cmの0歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、4月～9月期には1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。各年級群の資源状態と調査船調査の結果から、2018年級群の豊度は2017年級群を下回り、2019年級群の豊度は2018年級群を上回るとみられる。2020年級群の豊度を予測するのは難しいが、東シナ海における着底稚魚の分布量(0歳魚の資源量指標値の一つとなっている)と高い相関が見られる4月半ばの好適水温帯面積*は、2020年(予測値)は2019年を下回ると見込まれるため、2020年級群の豊度は2019年級群を下回ると考えられる。全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量と直近までの漁獲状況を反映して、沖合域の漁況は、前年並み、沿岸域の漁況は、前年・平年並みと考えられる。

*好適水温帯面積：東シナ海の着底稚魚調査結果の解析に基づく計算海域における表層水温18～22℃の面積。

(2) マサバ

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないため、漁獲は低調に推移すると考えられる。沖合域、沿岸域とも、前半は1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、後半には0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲される。11月～2月の漁況から判断すると、2018年級群の豊度は2017年級群より低く、2019年級群の豊度は2018年級群よりやや低いと考えられる。2020年級群の豊度を予測するのは困難であるが、資源評価における親魚量は微増であるため、2019年級群並みと見積もるのが妥当であろう。0・1歳魚が漁獲の主体であることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

沖合域の漁況は、来遊量が前年並みであることや漁獲の主対象がすでに他魚種に移っていることから判断して、

不漁だった前年並みと考えられる。また沿岸域の漁況は、11月～2月の漁獲状況から判断して、前年・平年並みと考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、4月～9月期には沖合域では1歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。また沿岸域では35cm前後の1～3歳魚（小～中銘柄）が漁獲の主体となる。11月～2月の漁況から判断すると、2018年級群の豊度は2017年級群並みで、2019年級群の豊度は2018年級群を下回ると考えられる。2020年級群の豊度を予測するのは困難であるが、資源評価における親魚量は横ばい傾向であるため、2019年級群並みと見積もるのが妥当であろう。これらから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

沖合域の漁況は、来遊量が前年並みであることを反映して、不漁だった前年並みと考えられる。また沿岸域の漁況は、資源評価の動向から判断して、低調だった前年並みで、平年を下回ると考えられる。

(4) マイワシ

例年、4月～9月期の前半は1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が、後半は0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。これまでの漁況の経過等から、2018年級群の豊度は2017年級群と同等で、2019年級群の豊度は2018年級群以下であると考えられる。2020年級群の豊度を予測するのは困難であるが、直近の漁況では九州沿岸への1歳魚以上の来遊が前年と同様に少ないものの、日本海西部沿岸域に多くの来遊が確認されていることから、2020年級群の豊度は2019年級群より大きい可能性が高い。そのため、西海ブロックにおける近年の漁獲の主体が0・1歳魚であることを考慮すると、今期の来遊量は低調だった前年並みで、平年を下回ると考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、4月～9月期の前半は1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半に0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。これまでの漁況等から、2019年級群の豊度は2018年級群並みと考えられる。産卵量調査の結果から、九州西岸における産卵量は減少傾向にあり、2019年は2018年と同様に低い水準だった。2020年級群の豊度を現時点で予測するのは困難であるが、産卵量を親魚量と読みかえ、親魚量の水準は2018年と2019年と同程度だったとすると、2020年級群は2019年級群と同程度と考えられる。さらに漁獲量の時系列解析の結果を考慮すると、今期の来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、4月～9月期の前半は0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半は0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が主体に1歳魚（大羽銘柄）も混じって漁獲される。これまでの漁況等から、2019年級群の春季発生群の豊度は2018年級群の春季発生群並み、2019年級群の秋季発生群の豊度は2018年級群の秋季発生群の豊度を下回ると考えられる。2020年級群の春季発生群の豊度を予測するのは困難であるが、九州西岸の4月～9月期の漁獲量は近年比較的安定していることを考慮すると、今期の来遊量は前年・平年並みと考えられる。

表1. 沿岸域の漁況経過（2019年11月～2020年1月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口県	中型まき網漁業の漁獲量は69トンで、前年・平年を下回った（前年比17%、平年比22%）。	中型まき網漁業の漁獲量は30トンで、前年・平年を下回った（前年比18%、平年比14%）。	
福岡県	代表港中型まき網の漁獲量は20トンで、前年比11%、平年比38%と不漁であった。漁獲の63%を豆銘柄が、34%を中銘柄が占めた。棒受網での漁獲は僅かであった。小型定置網の漁獲量は12トンで、前年比77%、平年比165%であった。	代表港中型まき網の漁獲量は9トンで、前年比14%、平年比29%であった。漁獲の大半は豆銘柄であった。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網の漁獲量は4トンで、前年比6%、平年比17%と不漁であった。
佐賀県	漁獲量は96トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比66%、平年比88%）。	漁獲量は18トンで、前年・平年を下回った（前年比33%、平年比69%）。	
長崎県	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比147%、平年比153%）。	地域により差があるが、前年・平年を下回った（前年比78%、平年比76%）。	
熊本県	漁獲量は13トンで、前年比21%、平年比15%であった。	漁獲量は199トンで、前年比29%、平年比48%であった。	
鹿児島県	主要4港のまき網の漁獲量は507トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比87%、平年比74%）。	枕崎漁港のまき網の漁獲量は743トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比84%、平年比142%）。	枕崎漁港のまき網の漁獲量は1,000トンで、前年・平年を下回った（前年比27%、平年比49%）。

注：「前年」は2018年11月～2019年1月、「平年」は過去5年の平均値。

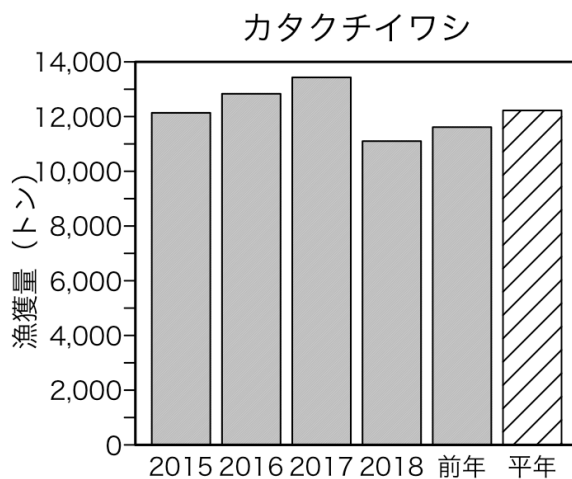
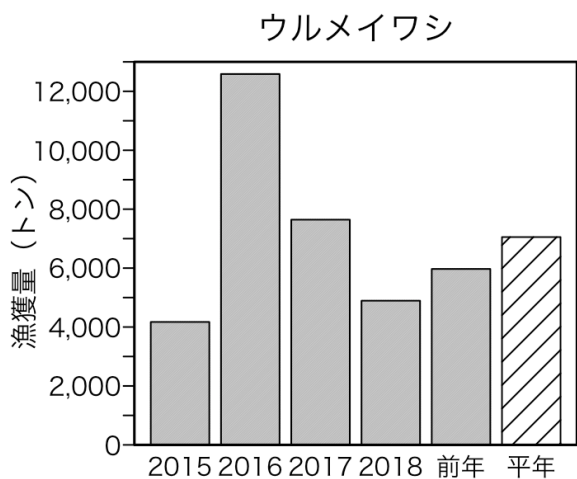
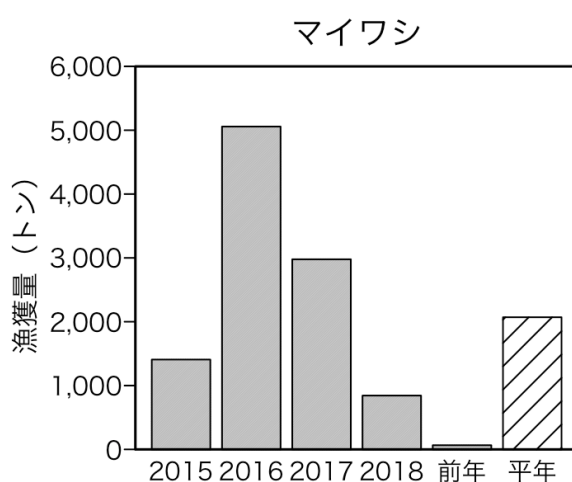
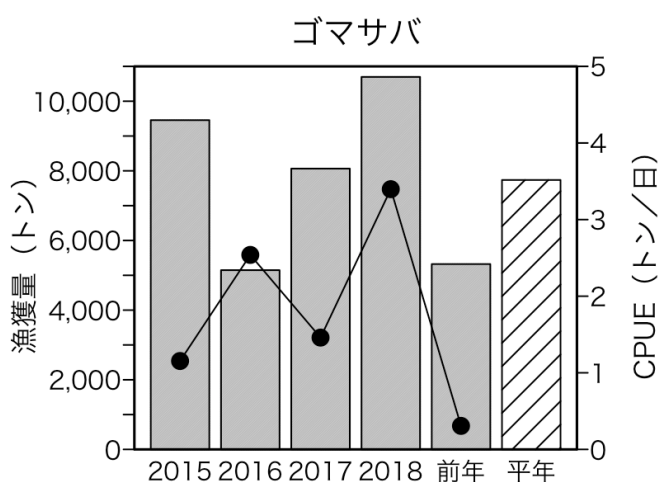
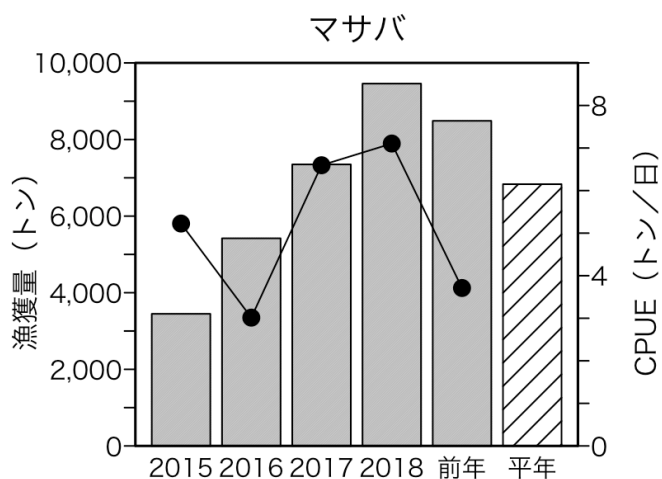
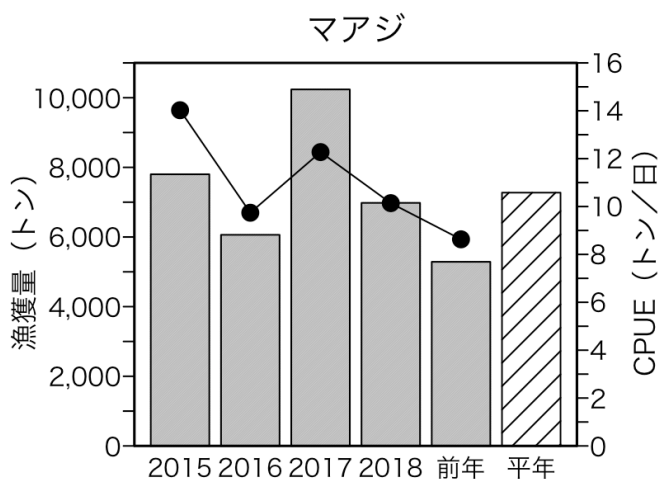
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 沿岸域の漁況経過（2019年11月～2020年1月）続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口県	中型まき網漁業の漁獲はなく、棒受網・すくい網漁業でも全く漁獲されなかった。	棒受網・すくい網漁業の漁獲はなかった。	棒受網・すくい網漁業の漁獲量は144トンで、前年・平年を下回った（前年比25%、平年比56%）。
福岡県	代表港中型まき網の漁獲量は僅かで、棒受網での漁獲もなかった。	代表港中型まき網の漁獲量は7トンで、前年比2,158%、平年比3,448%と好漁であった。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網での漁獲はなかった。棒受網の漁獲量は35トンで、前年比98%、平年比202%と好漁であった。
佐賀県	漁獲量は0.8トンで、前年・平年を上回った（前年比189%、平年比288%）。	漁獲量は0.7トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比113%、平年比68%）。	漁獲量は7トンで、前年・平年を下回った（前年比16%、平年比19%）。
長崎県	全ての地域で前年・平年を下回った（前年比0.3%、平年比0.05%）。	地域により差があるが、前年並みで、平年を下回った（前年比99%、平年比34%）。	地域により差があるが、前年を下回り、平年並みであった（前年比45%、平年比85%）。
熊本県	漁獲はなかった。	漁獲量は158トンで、前年比25%、平年比17%であった。	漁獲量は170トンで、前年比37%、平年比28%であった。
鹿児島県	主要4港のまき網の漁獲量は0トンであった。北薩海域の棒受網の漁獲量も0トンであった。	主要4港のまき網の漁獲量は277トンで、前年・平年を下回った（前年比21%、平年比13%）。北薩海域の棒受網の漁獲量は97トンで、前年・平年を下回った（前年比59%、平年比33%）。	主要4港のまき網の漁獲量は2トンで、前年・平年を下回った（前年比22%、平年比0.2%）。北薩海域の棒受網の漁獲量は48トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比56%、平年比128%）。

注：「前年」は2018年11月～2019年1月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量（ゴマサバを含むが主にマサバ）の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のゴマサバ漁獲量の合計値。4月～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
福岡県水産海洋技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
佐賀県玄海水産振興センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
長崎県総合水産試験場	(取りまとめ機関)
熊本県水産研究センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 西海区水産研究所